

子ども達の未来に寄り添ってみませんか...



会報 第5号

発行日 2023(令和5)年 2月 28日
社会福祉法人岩手愛児会内「杏の会」事務局
〒020-0102
岩手県盛岡市上田字松屋敷 11 番地 14
TEL:019-662-5696 / FAX:019-662-5695



高松の池にたたずむ白鳥たち

(撮影者: 米沢俊一)

医療・福祉・教育の連携強化を目指し、結集を！

杏の会 理事長 内 俊一



昨年末、「通常の学級に在籍する特別な教育的支援を必要とする児童生徒に関する調査」が文科省から公表された。それによれば、小中学生の8.8%が特別な支援が必要であり、10年前より、2.3%増加した。この間、児童生徒数は約1割減少し、特別支援学級のそれは、2.1倍となっている。

退職前の3年間、ことりさわ学園の大石先生を頼って、子どもの心身発達育成研究会に参加。拙い実践発表の機会もいただき勉強させてもらった。当時

最も緊急性の高い課題が、発達障がいを抱える子ども達とその対応に苦悩する親と教職員であると考え、校内研究のテーマを「全ての子どもがわかる喜びを実感できる指導法の工夫—算数科を中心としたユニバーサルデザインを取り組みを通して—」とし、特別支援教育を学校経営の柱に据えた。学校現場を離れて8年。私の危機感はさらに切実となっているようだ。

現在、岩手愛児会では子どもは未来もりおかこどもクリニック(コミュニティ小児医療)、みどり学園(虐待相談、里親支援)、ことり

さわ学園(不登校児童支援)の外来事業を一つにまとめ、医療・福祉・教育連携のもと、困っている子ども達、家族、学校からの相談をワンストップで解決していく未来の福祉施設「イーハトーブみらいのこども広場」の建設を計画している。そして、杏の会は、その構想を全面的に支援している。多忙を極める教育現場に身を置いていると他機関との連携を図ることは、更なる労働強化に思えるかもしれない。しかし、現状打開の道はあるべき姿を模索することだ。子ども達のために三者が結集することを強く願っている。

会員入会状況

〈 1月31日現在 〉

総会員数	272件
R4.1月以降	29件

※皆様からのご意見、ご感想をお待ちしております。杏の会事務局までメール又はFAXをいただければ幸いです。

2022年度 学校教育相談冬季研修会開催

児童心理治療施設ことりさわ学園 園長 田中 仁

1月10日、ことりさわ学園(子どもの心身発達育成研究会)が主催で学校教育相談冬季研修会を開催。講師にこどもの心のケアハウス嵐山学園(埼玉県比企郡嵐山町)の園長で精神科医の早川洋先生をお迎えし、「虐待の早期発見と対応・支援〜家族との関わりの限界と関係機関との連携のあり方〜」をテーマにご講演頂きました。

子育ては本来公共的なものだったが、70年代あたりからなかなか子育てへの公的支出が増えなかったことを問題視し、家庭養育の支援のためには関係機関が情報を共有し、専門分野が違っても互いに認識を一つにすることが重要と訴え「子どもの困難

さを上回る総合力が必要だ」と強調。

ふれあいランドいわての会場には県内の教員ら45名が参加し、コロナ禍の心配もありましたが三年ぶりに対面での開催となりました。



早川先生の講演

◇岩手愛児会活動報告

○お年玉プレゼント(1月7日)



新春の集いで株式会社カガヤ様から、みどり学園・ことりさわ学園で生活する子どもたちに希望するお年玉プレゼントを一人ひとりに手渡しして頂きました。子どもたちは笑顔満開です。

○スキー教室(1月11日)



八幡平リゾートでスキー教室を開催。児童7名が参加し、頂上から滑走する子や、スキー初体験の子も白銀の大自然に触れながら楽しい一日を過ごしてきました。

11月26日開催公開シンポジウムの様子は下記 QR コードを読み込んで動画にて視聴できます。(YouTube)



社会福祉法人 岩手愛児会
後援会 杏の会 事務局

E-mail:

annzunokai@gmail.com

子ども達の未来に
寄り添ってみませんか…



Web サイト

URL:
<https://www.ajji.or.jp/publics/index/94/>

杏の会主催の公開シンポジウム「未来の子ども福祉を考える」を振り返って

子どもは未来もりおかこどもクリニック 院長 米沢俊一

令和4年11月26日、新型コロナ感染再拡大の中、ハイブリッド形式で行い、参加者はスタッフあわせて約80名でした。今回のシンポジウムのテーマは、『家族・学校問題から見た未来の子ども福祉』ということで、福祉施設建築、不登校、子どもの貧困、不適切養育等が内容でした。

このテーマに沿って、まず基調講演として「地域コミュニティと福祉施設一建築計画学の立場から」として、福祉建築が専門の岩手県立大学副学長狩野徹先生にお願いしました。先生のご講演で、「福祉施設は地域コミュニティに開かれ、そして地域に溶け込んで活動して、ハード面、ソフト面ですべてがバリアフリーでなければならない」という趣旨のお話をいただきました。

シンポジウムは『家族・学校問題から見た未来の子ども福祉』をテーマに各分野の専門家から、下記のテーマで問題提起をしていただきました。

医療側からは「小児医療からみた未来の児童福祉」

石川 健先生(岩手医科大学小児科 特任教授)

教育側から「これからの学校不適応児の教育・福祉・医療連携」

千葉 千穂子 先生(八幡平市教育委員会教育指導課 教育相談員)

行政側から「こどもの貧困からみた未来のこどもの福祉行政」

佐久山 久美子 先生(盛岡市子ども未来部 次長)

福祉側から「家庭・学校からはみ出す子どもの心のケア」

三上 邦彦 先生(岩手県立大学社会福祉学部人間福祉学科 教授)

石川先生は、自分自身の経験から重症児、慢性疾患児とも医療面で助けられても、在宅療養になったときに小児科医は、児童福祉法で保障される生活について、助成制度の習熟、QOL向上のための多職種連携のチーム医療および地方包括ケアの核として動くことが望ましいと訴えられました。

千葉先生は、八幡平市教育委員会が実際に行っている、児童の医療、教育、福祉、行政の連携の実践を分かりやすく話され、特に要保護児童対策地域協議会のメンバーと一緒に学校、家庭の問題児童を支援していること、不登校児童は学校、ことりさわ学園、もりおかこどもクリニックと連携して対応していることなどを話されました。

佐久山先生は、盛岡市子ども未来部の担当課でおこなっているフードバンクNPOと連携した事業を紹介しました。食事の提供を通じて、フードバンクを利用している家族が、生活の苦しさや家庭内の悩みを本音でNPOに訴え、NPOがその情報を担当課に届け、それを受けて行政が動くシステムについて話していただくなど、盛岡市の福祉行政を紹介していただきました。

三上先生は、実際の児童相談所時代の心理士としてのご経験、そして、長年の愛児会2施設からの相談ならびにスーパーバイズを通じて、トラウマのある子ども達への心のケアについてのお話でした。

このシンポジウムを通して、「21世紀を子どもの世紀にするには、医療、教育、福祉、行政が、もはや連携ではなく、一緒に手を携えて協働して子どもと家庭を守っていかなければならない」と、私は強く感じました。

今回のシンポジウムで講師の方々に、今後の福祉と各分野の協働について、多くの示唆を戴いたことに、感謝いたします。



編集後記

漢字の「卵」と「卯」が似ていると気づきました。これらの漢字を文章に入れて、今の世情について考えてみました。

安値安定の代表とされていた「卵」をはじめ、食料品や物価が飛び跳ねるように高騰しています。また、電気代や燃料費の大幅値上げも予定されて、家計等はもろに直撃を受けています。

今年、兎のように飛び跳ねて、『飛躍の「卯」の年へ』と願い、コロナ禍から本当に抜け出して解放される年でもあり、法人や杏の会の新たな躍進にも期待できると思います。

他方では、家計を預かる主夫として、節約や減速志向の生活に、毎日悩まされています。

(村上)